ドゥンス・スコトゥス『「命題集」講義録』第 2 巻第 3 区分第 1 部第 4 問題（nn. 102–24）　試訳

石田　隆太／本間　裕之

はじめに

本稿は、ドゥンス・スコトゥスの『「命題集」講義録』第 2 巻第 3 区分第 1 部「個体化の原理について」第 4 問題の試訳であり、これ以前の試訳[1]に続くものである。凡例についても前稿を参照されたい。

第 4 問題は、質料的実体の個体性が附帯性の一つである量によって存在するのか否かを問題とする。第 73 段落から第 101 段落にかけて彼は、個体化の原理を量だと考える立場を「四つの途」によって批判した。続く第 102 段落から第 106 段落で彼は、すでに第 67 段落から第 69 段落において示した対立する立場が論拠としていたことについて批判を展開する。特に、アリストテレスの『形而上学』第 5 巻を典拠にしながら量が同じ理拠に属する諸部分への分割である種の諸個体への分割を第一にもたらすとする第 67 段落の議論について重点的に批判する（第 102–5 段落）。それを踏まえて第 107 段落では、「この水」を例にとって、自身の立場として附帯性の一つにすぎない量が質料的実体にとって個体化の原理であることを否定する。『オルディナティオ』における並行箇所（第 2 巻第 3 区分第 1 部第 4 問題第 111 段落）での言い方を引用するなら、「〈実体が或る附帯性によって個体である、つまり実体が自らにとって附帯的なものによって、その下位の部分へと区別され、このものではないということが実体に反する〉ということは不可能である」（中世思想原典集成 I.18, p. 264）。

次に第 108 段落から第 118 段落でスコトゥスは、第 67 段落から第 69 段落において示した対立する立場について改めて批判を展開する。今度は第 68 段落や第 69 段落の議論についても個別に批判する。第 68 段落および第 69 段落は、個々の質料的実体の実体形相が区別される前提としての個々の質料の区別が量によってなされることを主張していた。

第 4 問題の最後としてスコトゥスは、第 119 段落から第 124 段落において、権威

[1] 『筑波哲学』26 (2018): 123–38; 28 (2020): 75–88; 29 (2021): 127–44.

にもとづく議論（第 62–64 段落）に対する異論解答を展開する。対象となる権威はボエティウス、ダマスケヌス、アヴィセンナであり、基本的には彼らを救う余地が見出されている。

第 5 問題以降の箇所の試訳については後稿を期することにしたい。なお本稿は、下訳を I が作成した上で訳者二人が検討を加えて作成したものである（I）[2]。

試訳

第 4 問題

量はそれによって質料的実体がこれであり、単数であり、諸々の下属的部分へと不可分であるところの定立者であるのか

e. 意見の諸論拠に反対する

102. さらには、かの意見の諸論拠［Cf. 第 67–69 段落］に反対する。

その理由は以下の通りである。量は同じ理拠に属する諸部分への可分性の形相的理拠であるのだから、質料的実体の種的本性は量によってのみ分割されうると議論される場合［Cf. 第 67 段落］、――これに反対する。或る可分性の形相的理拠であるものは、その分割によって分割されるものの内にある（さもなければ、その分割されるものを分割しなかっただろう）。しかるに、量は種的本性の内に形相的にあるのではない。それゆえ、形相的にそれが種的本性のその諸部分への可分性の理拠であるのではない。

103. それゆえ、或る量的なもののその諸部分への分割は種的本性のその諸々の下属的部分への分割であるというようにして、［第 67 段落における議論の］論拠は偽なるものとして想像されている。――これが偽である理由は次の通りである。「統合的部分」〔pars integralis〕は決してその全体ではないが、「下属的部分」〔pars subiectiva〕は常にその全体である。それゆえ、量によって全体が分割されるということにもとづくなら、部分は分割された「全体」ではないのだから、連続的なものの分割からは決して種的本性の分割は結論づけられえない。

104. さらには、その論拠は［アリストテレスの］テクストの偽なる理解に由来す

[2] 本稿は、JSPS 科研費 18K12191（石田）の助成を受けたものである。

る。その理由は次の通りである。哲学者［アリストテレス］が言うことには「量は、内にあるものどもへ分割されるのであり、そのものどものうちの個々のものは或るものでありこの或るものであるよう本性づけられている」［Cf. 第 67 段落］。すなわち、彼は「内にあるものどもへ分割される」と言っているので、分割がなされることで新たに生成される諸部分は排除される。また彼は「或るものであるよう本性づけられている」と言うことで、自体的に存立するものであるよう本性づけられているということを理解する。また彼が「この或るものであるよう本性づけられている」と言うことで、類の分割は排除される。それゆえ、以上から、量は同じ理拠に属する諸部分へと可分的だということが認められるのか。いかなる点でも認められない。その理由は次の通りである。6 という数が 2×3、3×2、4＋2 から複合され、これらのものへの分割だと措定されるとしよう。――これは「そのものどものうちの任意のものが或るものでありこの或るものであるよう本性づけられている、内にあるものどもへの」量の分割ではあるが、やはりその諸部分は同じ理拠に属さない。それゆえ、量的なものの分割も別の理拠に属する諸部分への分割ではありうるが、それは量の理拠によらない。――例えば、仮に人間が心臓と頭に分割されるとしても、これは同じ理拠に属する諸部分への分割ではない。それゆえ、量は実体が別の理拠に属する諸部分へ分割されることを許容するものの、そうした分割は量によって生じない。

105. また、かのテクスト［Cf. 第 67 段落］は全くもって提起されたことに沿っていない。その理由は次の通りである。「量的なもの」は「内にあるものどもへ」分割され、それらは全体そのものを統合する。ところで、種的本性は、あたかも種的本性が諸個体の諸本性から統合された何らかのものであるかのようにして諸個体へ分割されるのではない。そしてそれゆえ、量が、内にあって同じ理拠に属する諸部分へ分割されるということは、全くもって提起されたことに沿っていない。

それゆえ、その論拠［Cf. 第 67 段落］は全くもって何の役にも立たない。

106. さらには、別のものに反対する。「生成するものは質料のゆえに別のものを生成する」と議論される場合［Cf. 第 69 段落］、私は次のように議論する。（何であれ他のものを埒外に置くなら）生成するものは生み出されたものと区別される。なぜなら、何ものも自らを生成しないからである。しかるに、生成するものは量によってではなくて、自らの固有な形相によって生成する。なぜなら、量は能動形相〔forma activa〕ではないのだから、生成することの理拠や生成の終極ではありえないからである。それゆえ、量は生成するものと生み出されたものの区別には何もしない。

B．自身の結論

107．それゆえ、こうした諸論拠のゆえに、私は次のように容認する。量の下にある「この水」は、このもの自身が留まるなら、それをめぐって実体的な変化が生じなくとも、この水ではないものと共起できない。そしてそれゆえ、それはより後のものである量によっては単数でありえない。そしてそれ［すなわち、この水が単数である原理］が何であるかは後で［Cf. 第 164–77 段落］明らかとなる。

II．他の人々の意見に賛成する諸論拠に対して

108．諸論拠［Cf. 第 67–69 段落］に対して。

第一の論拠［Cf. 第 67 段落］に対しては上述のことごと［Cf. 第 102–5 段落］による解答が明らかである。第一に、それは提起されたことに沿っていない。なぜなら、量的なものの分割は本性の諸々の下属的部分への分割ではないからである。第二に、同質のものどもにおけるように、下属的である諸々の量的部分への分割は時折生じることはあるが、――それは異質のものどもにおいては成り立たないからである。

109．別の論拠に対しては、「［一方の］形相が［他方の］形相から区別されるのは、それが別の質料においてあるからにほかならない」と議論される場合［Cf. 第 68 段落］、――それが偽である理由は次の通りである。形相は質料よりも存在において先行するのと同様にして、一なる存在（或るものの存在性や一なる存在性はこれにもとづく）を与えることにおいても先行する。それにもかかわらず、形相がより先ではあるものの、やはりそれは何らかの部分的な原因として複合体の構成に［質料と］協働する。

110．そして「形相のうちにあるあらゆる区別は種的である」と言われる場合［Cf. 第 68 段落］、このことに対する解答は第 1 巻［第 17 区分第 180–82 段落］で明らかである。

111．またさらに、「質料がこの質料であるのは量によってのみである」［Cf. 第 68 段落］と解される命題は偽である。というのも、「この」質料はそれに量が到来するより前にあるからである。ただし、実際には量的な存在としての存在だけをもつ。――

無論、量とは別の固有な部分可能性〔partibilitas〕をもつのでもない。

112．そして「質料が分割され複数化されるのは別々の量の下にある場合だけである」と言われる場合［Cf. 第 68 段落］、それは真である。――そしてここでは量が「それなしには諸個体の複数化がないもの」と解されている。ところで、もし「それなしにはない」ということが質料の分割の観点だけだとするなら、ましてなおさらそれは生み出されたものの観点でもやはり「それなしにはない」。それゆえ、それが同じ理拠に属する諸部分への分割の「形相的理拠」であるということは帰結しない。

113．それゆえ、「生成するものは質料のゆえに別のものを生成し、質料は量の別の部分の下にある場合にのみ別のものであるのだから、量は同じ理拠に属する諸部分への分割の形相的理拠である」［Cf. 第 69 段落］ということは帰結しない。というのも、量が「それなしにはない」或るものとして生成に必要だということは帰結するが、このことから、それが生成に必要とされる形相的理拠であるということは帰結しないからである。

114．生成するものが量的なものに対して能動することでのみ別のものを生成するがゆえに量は生成に先行するのだから、量は生み出されたものの個体化に先行する（既述のようにそのようには帰結しないが）とあなたが言ったとしよう[3]。――私は次のように解答する。量および他の諸附帯性も生成に先行することは真だが、それはやはり消滅したものにおける量および諸附帯性のことである。それゆえ、消滅したものにおける量が生成に先行することをあなたは証明しているが、やはり生み出されたものにおける量はその［生み出されたものの］実体に後続する。

115．だがやはり、あなたは次のように言うだろう。量は消滅したものにおいてのみならず生み出されたものにおいても生成に先行する。なぜなら、生成の瞬間において質料のなかではそれは形相の導入に先行するからである。しかるに、それは質料の量であるかぎり、生み出されたものの形相および個体化にその瞬間において本性という点で先行する。なぜなら、さもなければそれは量的でないものから生成しただろうし、

[3] サットンのトマス『第 1 任意討論集』第 21 問題主文「あなたは、生成はそれ自体では実体に向かって終極する、と言うだろう。それは真である。しかしながら、生成が終極する前に、そこでは質料において個体化をもたらす量があり、その質料から生成が生じる」（石田隆太、「サットンのトマス『第 1 任意討論集』第 21 問題 試訳」、『宗教学・比較思想学論集』22 (2021): 59）。

かくして量的なものが量的でないものから生じただろうからである[4]。

116. だが、彼らはこのように議論するべきではない。その理由は次の通りである。彼らが（註釈家［アヴェロエス］[5]に反対して）措定することには、いかなる形相も生成したものと消滅したものとで同じまま留まることはない（例えば、物体的形相は同じまま留まらない）。――そこからの帰結として、その者によれば実体形相は質料の第一の完成態であり量がそれではないのだから[6]、量は同じまま留まらないことが帰結し、かくしてそれは［実体］形相の導入に後続する。それゆえ、私は［第 115 段落における］論拠に対して次のように解答する。いかなる量も質料においては実体形相の導入に先行せず（というのも、その場合は量が実体形相よりも先に質料を完成させることになっただろうからである）、むしろそれは本性的に形相の導入に後続し、かくして複合体の存在に後続する。

117. そして「その場合は量的なものが量的でないものから生じただろう」と議論される場合［Cf. 第 115 段落］、私は次のように言う。もし、より前に存在する量的でない或るものから量的なものが生じるということが理解されるとするなら、（点から或る可分的なものが生じることのような）それは不可能である。それゆえ、「生成したもの」が消滅したものから生じるかぎりでは、それは量的なものから生じる。というのは、生成の瞬間の前には量的なものが絶えず存在したが、生成の瞬間においては先行する形相や量は消滅し、後続する形相が導入され、質料に延長する量は同じ瞬間にその形相に後続するからである。他方でもし議論する者が、或るものがその本質的な部分から生成されるかぎりで「量的なもの」が量的でないものから生じるということを意図するとするなら、――それは必然的である。なぜなら、質料は第一に形相によって完成され、その質料から複合体が生成し、その質料に延長する量が後続するからである。

118. だが、あなたは次のように言うだろう。本性的な能動者が無媒介に質料の本質に及びながら（実際は無媒介ではなく、質料が物体的である場合にかぎるように思われる）、本性的な能動者が常に物体に対して能動するのはどのようにして可能なのか。――私は次のように解答する。本性的な能動者が質料の本質に及ばないと言われるよ

---

[4] Cf. フォンテーヌのゴドフロワ『第 11 任意討論集』第 3 問題主文。
[5] アヴェロエス『天球の実体について』第 1 章。
[6] フォンテーヌのゴドフロワ『第 11 任意討論集』第 3 問題主文；『第 7 任意討論集』第 5 問題主文；『第 6 任意討論集』第 5 問題主文；『第 2 任意討論集』第 7 問題第 1 異論解答。

うな哲学がどこから来るかを私は知らない。というのも、本性的な能動者が実体形相を質料に導入するとするなら、必然的にそれは形相によって完成されうるかぎりでの質料に及ぶからである。それゆえ、質料が一着のチュニック（例えば量）を纏い、そのチュニックを媒介として形相を受容するということが理解されるべきではない。

III. 主要な諸論拠に対して

119. 主要な諸論拠に対して。

他の諸権威よりも説得力のあるボエティウスの権威に対して［Cf. 第 62 段落］、私は次のように言う。ボエティウスがそこで示そうとしていることには[7]、御父、御子、聖霊は三つのペルソナでありながら一なる神であり、それらは実体という点で異なる、数において三なる個体ではない。なぜなら、実体において諸附帯性の多様性は数的な差異をもたらすが、御父や御子などにおいては諸附帯性の多様性はありえないからである。なぜなら、後で彼が言うように、「単純形相は基体ではありえない」からである。今や私は次のように言う。ボエティウスのそうした意図が救われうるのは、諸附帯性は単にそれがなければ数的な差異がないようなものだと措定される場合であり、そこでは「諸附帯性の多様性がなければ数的な差異はありえない。しかるに、御父と御子にはそうした多様性はない。それゆえ、云々」と議論される。――これは、ボエティウスの意図に関しては救われうるが、ただし諸附帯性は数的な差異の形相的な原因ではない。

120. だが、実体において「諸附帯性の多様性は数的な差異をもたらす」と彼は意図的に言っているのだから、ボエティウス自身の意図に対して私たちはどのようにして言うことになるのか。私は次のように言う。この権威は、逐語的に次のように唱えて

[7] ボエティウス『三位一体論』第 1 章「ただし、数における差異をもたらすものは附帯性のうえでの分化です」（中世思想原典集成 I.5, p. 178）; 第 3 章「さて、神は神〔自身〕に対していかなる点でも差異を示しません。基体の担う附帯性によってであれ、本質的種差によってであれ、隔たるということがありません。ところが、なんらの差異もないところには全然なんらの多性もありませんから、したがってまた〈数〉も生じません。すなわち、そこにあるのは〈一性〉のみです。［中略］神が父・子と聖霊について三回述語されるとしても、それで三重の述語が〈数〉を作りはしないことになります」（182）; 第 2 章「内にいかなる数も、自体的存在のほかのいかなる他者ももたないものは、真に〈一〉なのです。また、それは基体となることができません。なぜならそれは形相であり、〔このような真の〕形相は基体となりえないからです。［中略］質料をともなわない形相は基体でありえないし、質料の内にあるのでもありません――もしそうだとしたら、それは形相ではなく形相の写像にすぎなかったでしょうから」（180）。

いると理解されるべきである。すなわち、諸附帯性は実体において或る差異をもたらすが、それは種的な差異ではないので、数的な差異である。それゆえ、諸附帯性は存在するかぎりで差異をもたらす。そして、その諸附帯性は数において異なるかぎりで数的な差異をもたらす。しかるに、それは第一の数的な差異ではないし、それが唯一の差異であるわけでもない。そしてそれゆえ、「それらは諸実体において数的な差異をもたらす。したがって、第一の数的な差異を唯一の差異としてもたらす」と議論するなら、議論のなかに帰結の誤謬がある。

121. だが、あなたは次のように言うだろう。諸附帯性の多様性は数的な差異の第一原因ではないが、第一の差異に随伴する。それゆえ、より後のものを埒外に置くなら、より前のものは留まるのだから、そこから帰結することには、神のものどもにおいては諸附帯性の多様性はないものの、やはりそこには数的な差異がある。そのようなわけで、ボエティウスは自らによって提起されたことを言っていない。

122. 私は次のように言う。ボエティウスが示しているのは神には数的な差異がないということであり、彼は次のように議論している。「諸附帯性の多様性は数的な差異をもたらす。しかるに、神には附帯性はない。なぜなら、単純形相は基体ではありえないからである。それゆえ、云々」。私は次のように言う。彼は原因に必然的に随伴する結果から議論している。すなわち、諸附帯性の多様性は数的な差異に必然的に随伴する。――そしてこれは真である。そしてそれゆえ、もし神にそうした多様性がないとするなら、そこには数的な差異がないことが帰結する。

123. ダマスケヌスに対しては［Cf. 第 63 段落］、次のことが言われるべきである。その権威は彼が同章の終わりで「ところで、同じ種における到来物であるものは何であれ、附帯性である」[8]と言っていることによって解決される。それゆえ、それらは種に属する附帯性である。そして［諸個体が異なるのは］諸附帯性によってではないということは同著者によって明らかであり、［『正当信仰論』］第 1 巻第 8 章で彼は次のように言う。「そして何よりも、それらが相互にあることではなくて、分離してあることにもとづく」[9]。そして彼がこう言うのは、相互にある神のものどもにおけるペルソ

[8] ダマスケヌス『論理学』第 4 章（Colligan, p. 7, ll. 6–19）「これらすべては附帯的ないし到来の差異および性質と言われ、附帯性のことである」（I）。

[9] ダマスケヌス『正当信仰論』第 1 巻第 8 章「ペトロとパウロは同じ本性に属し、共通の一つの本性を有していると、精神によってわれわれは認識する。［中略］ところが、もろもろの実体〔個体〕は互いに内在するものではない。それぞれが固有のものとして、また別個のものとし

ナのゆえである[10]。

124. アヴィセンナに対して［Cf. 第 64 段落］、私は次のように言う。彼は形而上学者が語るべき仕方で語っている。そこで彼は彼のやり方にしたがって、何であれ何性の理拠の外にあるものを「附帯性」と名づけている。かくして「一性」は存在性および事物の本質にとって附帯性である。そして諸個体がそれによって区別されるものはすべて、質料を要する種的本性の外にあるのだから――、彼はそれらすべてを「附帯性」と呼ぶ。それらが附帯性の類に属するからではなくて、種的本性の外にあるからである。そうしたかぎりで私たちはそれが「附帯性の誤謬」だと言う。それは中項が両極に対して外にあるからである（例えば「理性的」は動物に附帯し、かくして外に置かれる）[11]。

（いしだ・りゅうた　慶應義塾大学文学部訪問研究員）
（ほんま・ひろゆき　東京大学大学院人文社会系研究科在学）

て、すなわちそれ自体別のものとして区別される。他のものと自らを分かつ多くの相違を有しているからである。実際、場所によって分離され、時間の上でも異なっており、判断や力、姿形、すなわち外見や状態や気質や品位や習慣、そして多くの特徴ある固有性によって、さらにそれら以上に何よりも互いに内在しておらず、別々のものとして存在している事実上区別されるのである。ここから、二人あるいは三人、そして多くの人々について、われわれは語るのである。／さて、以上のことは全被造物に認められることである」（中世思想原典集成 I.3, p. 619）。

[10] 同上「しかしながら、聖なる、超本体の、万物を超越している、理解しがたい三位の場合は逆である。［中略］〔三つの〕個別者は互いに内在しており」（619–20）。

[11] Cf. ドゥンス・スコトゥス『「命題集」講義録』第 1 巻第 2 区分第 284 段落。